

雲華上人との交流と田能村竹田の画業

湯谷 祐三

一 はじめに

雲華上人（一七七三～一八五〇）とは、漢詩と墨蘭画をよくした江戸後期の浄土真宗の学僧である雲華院大含信慶講師のことである。その人柄と学識によって、頼山陽や田能村竹田・江馬細香・浦上春琴といった多くの人士と僧俗の垣根を超えた交流をしたことで知られる。

一方、田能村竹田（一七七七～一八三五）は江戸後期文人画の巨匠として著名だが、元来は豊後の岡藩士であり、藩命による『豊後国志』の編纂に従事した後、二十九歳からは京都への遊学を重ねて画業の向上をはかると共に、様々な文人との交流を深める。そうした中で、自作につけた漢文の題跋や漢詩の制作は勿論のこと、それまで日本ではほとんど注目されていなかった填詞（宋代の詞）の研究をしたり、文人の間で流行をみていた煎茶趣味を探究するなど、その文事の活動領域は多岐にわたり、単なる絵師としておくることのできない、文字通りの文人画家であった。また残された日記や随筆、交友の記録も、竹田の伝記研究のみならず、同時期の文人の風貌や動向を知る

上で貴重な資料となっている。

さらに、竹田がそうした自身の文事に関する著述を一つ一つ着実に刊行して世に出している点も重要で、主要な刊行著作としては、『填詞図譜』（填詞研究書）・『竹田莊詩話』（漢詩）・『今才調集』（漢詩文）・『泡茶新書三種』（煎茶書）・『自画題語』（題跋）・『山中人饒舌』（絵画随筆）などがあり、この他に、『屠赤瑣々録』（隨筆）や『竹田莊師友画録』（交友録）など、未刊の重要著作が多数ある。近年、主要な著作は『大分県先哲叢書』に活字翻刻された¹⁾。筆者は、江戸後期の京都における文人ネットワークの主要人物の一人でありながら、従来あまり取り上げられてこなかった雲華の生涯と文事を明らかにするため、その漢詩作品を翻刻した『雲華上人遺稿』を中心に、関係資料を収集分析して、雲華に関する詳細な年表を作成した²⁾。その過程で、田能村竹田と雲華との交流についても俯瞰してみたところ、これまでに考えられていたこととは異なる、あるいは全く指摘されていない、新しい知見を得ることができた。そして、両者の交流の軌跡が竹田の画業にも影響を与えており、竹田の絵画作品を考察する上でも、その交流の実態を明らかにすることが有効であるとわかった。本稿はこうした事柄について報告するものである。

二 雲華と竹田の初見時期

雲華と竹田の二人は、どちらも豊後の岡（現在の太分県竹田^{たけた}市）の出身である。雲華は安永二年（一七七三）、岡の満徳寺（真宗大谷派）において、その住持円寧師の次子として生まれたが、十二歳の時に父を亡くしたため、その伯父である日田広円寺の住持法蘭師について教えを受けるべく日田へ移ったと考えられる。一方の竹田は、安永六年に岡城下竹田村に藩医田能村碩庵の次子として生まれており、雲華より四歳の年少である。

巷間、両者が「幼なじみ」であるという伝承を耳にするが、筆者が接し得た資料においては、幼少期の両者が岡で直接交際したことを記すものは皆無であった。岡時代の雲華は満徳寺の西約一キロにある西休寺の学堂において

習学したと言われており³、十二歳で父を亡くしてすぐに竹田を離れ伯父のいる日田へ移っている。竹田は、幼少時には藩主の菩提寺である碧雲寺の西隣にある英雄寺で習学したとされる⁴。英雄寺は満徳寺の東南約五百米にある禅宗寺院である。そして藩医の子弟である竹田は、十一歳以降は藩校由学館に入学したと考えられる。雲華と竹田には、僧侶と藩士という社会的身分の違いもあることから、幼少期の両者には接触する機会はなかったのではないかと筆者は考えている⁵。「幼なじみ」説は、後年京都においてそれぞれ華々しく活躍し、生涯にわたって密接な交流を続けた二人が同郷であることから生じた俗説ではないだろうか。

それでは、資料的に確実視される雲華と竹田との初めての出会いは、いつのことであろうか。雲華と竹田の関係について言及のある宗像晋作氏の近時の論考を見ると、雲華と竹田との交際を示す初期の資料として挙げられているのは、いずれも文政六年（一八二三）の伊藤鏡河宛竹田書簡や竹田の日記であって、それ以前の両者の交流の有無については不明である⁶。

しかし、そうした竹田側の資料だけではなく、雲華側の資料を参看することによって、両者の交際が実際にはそれより二十一年も遡ることに筆者は気づいた。『雲華上人遺稿』収録の「雲華草別稿」に「謝田行蔵」と題された五言絶句がある⁷。起句に「君題山水画」とあり、題名の「行蔵」とは他ならぬ竹田の実名であるから、この詩が雲華から竹田に贈られたものであることは間違いないが、この詩自体には明確な作成年月が記されていないため、いつ頃の作品であるかはわからない。

ところが、雲華が後年住持となった中津の正行寺（真宗大谷派）に残された未刊の漢詩草稿である『雲華草卷二（写本一冊）』には、「壬戌稿、享和二年三十歳」の部分に正しくこの詩が含まれており、詩の製作年代が享和二年と判明する。これにより、雲華と竹田との交際は、通常考えられているような文政六年（一八二三）に始まったものではなく、それよりも二十一年も以前の享和二年（一八〇二）、雲華三十歳、竹田二十六歳の時に遡ることがわかっ

た。

雲華は十九歳の時には実姉の夫でもある学僧頓慧鳳嶺師の養子となって中津の正行寺に入り、順調に宗学を積み重ね、三十歳の頃には気鋭の学僧として九州の各地で講義をするまでになっていた。竹田は二十二歳より従事していた『豊後国志』編纂の仕事が大詰めを迎えており、享和二年の前半はそのための公務で江戸に滞在していた。こうした状況を見ると、この頃の両者には取り立てて接点がないように見受けられるのだが、それでは両者はいったいどこで出会ったのだろうか。

筆者は、先の「謝田行蔵」詩に隣接して記されている、「帰省日同諸子登大勝閣分得棲字二首」と題された二首の五言律詩に注目する。題名に「帰省」とある以上、この詩が詠まれたのは雲華の故郷である岡であると考えられる。すると、大勝閣というのは、旧大勝院の山門上に作られ、現在円通閣と呼ばれている楼閣ではないかと推定できる。これは岡藩主中川久貞が江戸から招いた儒学者である唐橋君山のために築いたとされるもので、屋根瓦には寛政七年の銘文があり、中国の蘇州寒山寺の楼門を模したものである。この二種の律詩の題名は、前述の『雲華草卷二』では、「抄冬登大勝閣分得棲字」となっており、詩の制作時期が抄冬、すなわち十二月であると確定する。

この楼閣において、君山や伊藤鏡河・角田九華ら、岡城下の文人が集って詩画会などが開かれ、藩校である由学館で君山の薫陶を受けていた竹田もこれに参加していたのである⁸⁾。よって、享和二年(一八〇二)十二月、岡に帰省した雲華がこの円通閣を訪れることで、竹田と雲華との初対面が実現したと筆者は考えている。

この頃の竹田は、角田九華や伊藤鏡河の指導のもとで、もっぱら『豊後国志』の編纂に従事しており、未だ「文人」としては全く無名の人物であった。一方の雲華も、前年の享和元年に博多の亀井南冥の知遇を得て漢詩の添削指導を受け始めるなど、本格的に文人趣味の鍛錬を開始した頃であって、学僧としても未だ駆け出しであった。両者の友人関係が特別な名声とは無縁の時期に形成されたことが、生涯にわたる二人の交際をより親しみ深いものに

したのであろう。

ちなみに雲華と頼山陽との初見は文化五年(一八〇八)であり、『山陽詩集』『春水日記』、竹田と頼山陽の初見は文化八年(一八一―)三月とされるから、『大風流田能村竹田』一巻一一九頁)、それぞれが頼山陽と知り合う以前に、雲華と竹田は既に面識があつたのである。

なお、この時に竹田から雲華に贈られたという「山水画」の現存については定かでないが、享和三年癸亥の竹田の自賛がある「漁父図」を見ると、文人画の画譜などをそのまま写したような素朴な運筆の山水画であり、雲華に贈られたものも、恐らくはこれと大同小異ではなかつたかと想像される⁹⁾。竹田の作画技術は、この後文化二年から四年にかけての京都遊学を経て、急速に本格的なものとなつてゆくのである。

三 文政元年の雲華と竹田―「芙蓉残雪図」の成立―

さてそれでは、雲華が竹田の画業に与えた影響について具体的な考察を始めたい。まず、雲華生涯の思い出となつた文政元年(一八一八)の富士登山を取り上げ、竹田との関係について考えてみる。この年が雲華にとつて実に多事多忙な一年であつたことについては小文を草したが¹⁰⁾、ここでは富士登頂に限つて概要を述べると、雲華がこの年の正月を中津で迎えたときには既に富士登山の計画は出来上がつており、三月に江戸へ向けて出立、その月末には西遊に下つて来た頼山陽と下関で邂逅してすぐに東西に別れ、善光寺を經由して五月には江戸の中津藩邸に入つて歓待を受けた後、六月十八日、ついに富士山の登頂を果たした(なお頼山陽は生涯ただ一度となつたこの年の九州行の終盤、十二月に中津の雲華の自坊正行寺を訪ねて、雲華と再会し、これにより名勝耶馬溪が誕生している)。

富士山の第八石室では、雪の水で揮毫や点茶を試みるなど風流を尽くす雲華であつたが、その心中に真つ先に去

来したのは、この絶景を竹田に見せてやりたいという思いであった。「登岳有懐竹田詞兄」と題する七言絶句で、竹田の不在を心から惜しんでいる¹¹。

ところが下山後の七月に思いがけぬ内室の訃報に接した雲華は急いで中津に帰還し、養父鳳嶺師の三周忌も勤め、さらに十二歳より薫陶を受けた日田広田寺の法蘭師の墓参のために日田を訪れた。そして、八月には岡の竹田を訪ねていることが竹田自身の『白夜快語』に記されている¹²。このおり雲華が竹田に向かい、つい二ヶ月前の富士登山の苦勞と山頂からの絶景を熱く語ったであろうことは想像に難くない。竹田はそれに対してどう答えたのだろうか。

竹田には「芙蓉残雪図」と題する堂々たる富士山図がある（大分市美術館蔵、重文）¹³。縦長の画面の下半分に雪の積もった富士山と雲海が簡素なフォルムで描かれ、上半分には自賛が記されている。その竹田自賛の内容は「自分も前から登山の希望があったが、あなたが登ったと聞いて羽が生えるような思いである。急いで硯をぬぐい、秃筆をひねって描いてみた」云々とあり（原漢文）、最後に「聞 巨株桑兄今茲夏六月登不盡峯為／写此図并題短古一篇 寄贈文政己卯秋八月／竹田老夫憲」と落款がある。つまり、今夏六月に「巨株桑兄」が不盡峯（富士峯）に登ったので、この図を写し自賛を入れて文政己卯の八月に贈るといっているのである。

この「巨株桑兄」については、未だに人物の特定が成されておらず、最近の宗像健一氏の解説文では、「桑田姓の人物と思われる」とするが¹⁴、恐らくそうではあるまい。「桑兄」とは僧侶を桑門と呼ぶことに由来するもので、雲華は竹田より四歳年長であることから、竹田は僧侶の雲華を指して「桑兄」と呼んだと筆者は考える。この時期に富士山に登った竹田の関係者で、竹田が作品を贈呈するほどの親交があった人物としては雲華以外にはいない。そうしてみれば、これまで雲華の関与はまったく指摘されていないものの、この「芙蓉残雪図」は竹田と雲華との交際の中から生まれた作品として認知されねばならない。ただし、「巨株」なる仮名の意味は今のところ未詳で後考を俟ちたい。

若干不審が残るのは、その年紀である。雲華が登頂したのは文政元年（二八一八）戊寅の六月で、その年の八月に竹田を訪ねているのは前述の通りであるが、それならば落款の年紀が「文政己卯秋八月」（文政二年）となっているのは奇妙である。落款の内容では、今夏六月に登ったことを聞いて八月に描いたというのであるから、文政元年戊寅となるはずである。落款の通りとすれば、竹田は雲華の話聞いて一年も経ってから描いたことになる。勿論、竹田自身が干支を間違えた可能性も考慮せねばならぬが、筆者はこの作品の完成はやはり文政二年ではないかと考えている。

先の宗像健一氏によると、この作品は「画絹に礬水を引いた後、胡粉を入れた部分は不明ながら、他の部分には、全体に薄く、まずは藤黄を引いているように思われる」云々とされ、以下詳細にその画法が記述されている。つまり、この絵はそのフォルムこそ単純なものであるが、紙本に草卒に描かれたのではなく、周到な準備のもとで入念に制作されたものごとくである。そうだとすれば、文政元年の八月に雲華から登山の話聞いて短期間に出来上がるものではなく、越年して完成を見たということも充分に考えられるのではなからうか。

四 天保三年の雲華と竹田―「曲溪複嶺図」「梅花書屋図」の成立―

天保三年（一八三二）は雲華と竹田・頼山陽の三者にとつて特別な年となった。この年の九月、思いがけなくも頼山陽が急逝するからである。その山陽の逝去をはさんで、「曲溪複嶺図」と「梅花書屋図」という、竹田の画業を代表するような二つの大作が生み出され、そのいずれの場にも雲華が竹田の間近に居たのである。京都に留まって死を迎えた山陽はともかく、雲華と竹田のこの年の動きは実にめまぐるしい。

年頭、在京の雲華は一月三日に頼山陽宅を朝晩の二回訪問し、「一日過君已兩回」と苦笑しているが、結果的にはこれが両者の永訣となった¹⁵⁾。四日に帰国のため離京、月末二十七日に中津に到着した。二月二十九日から三月二十

九日まで雲華が日田に滞在していたことが、廣瀬淡窓の日記で確認できる。そして、四月二日に雲華は生地である岡に入り、四日・五日は洗竹居・光西寺に遊び、七日から十四日まで実父円寧師の五十回忌を生家である満徳寺にて盛大に執行している(太一宛竹田書簡)。

このころ竹田は、昨年四月の帰国以来、別府への入湯などもはさんで、主に岡の竹田荘にあつて絵画制作や所蔵印譜の作成などを行っており、四月と五月の初頭に雲華を竹田荘に迎えている。京都では連日のように雅交を重ねていた二人であったが、故郷の岡で歓談するのは文政三年以来、実に十三年ぶりのことであった。五月五日には雲華に「松下參禪図」を与えた。

雲華は五月十八日には既に岡を離れており、沿海部の佐伯で『易行品』の講義を行っている¹⁶。竹田は、帰郷して竹田荘に滞在していた弟子の帆足杏雨と共に、六月一日、杏雨の故郷である戸次^{トシマ}へ向けて出立した。そして六月十八日に、雲華と竹田は再び合流し、杏雨に案内されて戸次川(大野川)の船遊びを共に楽しんでいる¹⁷。両者が戸次で落ち合つて遊ぶことは、岡での面談のうちに既に計画されていたと思われる。

この戸次遊覧中の六月二十五日に製作されたのが、「曲溪複嶺図」(大分市美術館蔵、重文)である¹⁸。当初二幅が作成され、世話になった帆足家と雲華にそれぞれ贈つたと、現存の漢詩幅に明記されており、雲華と竹田の交流の成果であることは既に明白である(現存作品は帆足家に贈られたものであり、もう一幅の雲華に贈られたとされるものは現在所在不明)。

その題材について宗像健一氏は、「戸次辺を図様の中心に置いた、大野川の水系を辿る景が描き込まれているものと把握される」として、戸次近辺の実景であるとされるが¹⁹、一方で、雲華に贈られたものに記されていたと考えられる題跋文には、戸次・耶馬・八戸・玖磨などの、これまでに見聞して胸中にたくわえていた風景を描いたと竹田自身が述べており(『自画題語』)²⁰、実景を描いたものなのか、それとも特定の場所ではない所謂「胸中山」を描い

たものなのかについては注意を要する。ともあれ、この大作の成立こそ、この年前半の両者の緊密な交際の大成であることは間違いない。二人は今秋の再会をかくく約して一旦別れ、竹田は七月初旬には岡に戻っている。

さて、岡に戻った竹田が頼山陽病臥（六月十二日に初めて吐血している）の報に接したことは、竹田が在京の息子太一に宛てた七月二十八日付書簡からわかる。その部分を抄出すると、「拙も此表様子次第にハ九月初旬より豊前ニ参候而、含公を訪ひ含公同道直二渡海再游可仕やと内存致し居候。然シ未だ一定ハせず候。山陽兄大不快のよし如何ヤ承度候、しかし此節ハ大分快方と存候」とある。太一は、雲華・山陽・竹田らとは昵懇の文人仲間である医師小石元瑞に入門しており、現に山陽の主治医が小石であることから、山陽の容態を知るには打つてついでであった。

ただ、ここで注意せねばならないのは、来る九月に豊前に行き、含公（雲華のこと）と同道して上京しようとするのは、決して山陽の見舞いが主たる目的ではなかったということである。「しかし此節ハ大分快方と存候」とあるように、山陽の容態について竹田は樂觀的であった。竹田の上洛後の行動などから見ると、この度の竹田の上洛の目的は大きく二つあり、一つは『山中人饒舌』や『填詞函譜』続巻などの自著の刊行作業を自身で進めること、もう一つは、文政六年（一八二三）以来、小石のもとで医業を修学して終業間近となった息子太一の現在の様子を確かめることであった²¹。雲華と同道することについては、既に六月末に今秋の再会を約した時点で決めていたことだろう。

竹田は九月初旬に帆足杏雨を伴って中津に入り正行寺を訪れたが、雲華は不在で、雲華の後嗣である大有広慶師（雲華の甥、ただし翌天保四年十月二十八日急逝）に迎えられてそのまま逗留した。竹田自身の『師友画録』巻下の「釈大有」の項目に、「客秋、予北游留其書院、殆三旬連床起臥、吟酌為歡」とあり、九月のほぼ一ヶ月にわたって正行寺の書院に滞在したことがわかる。この時はおりからの茸の豊作とて、竹田は大有師と様々な種類の茸を思う存分に飽食し、それらを「秋味冊」や「筍草図」などの作品に残した。

一方の雲華は、九月二日の段階ではまだ日田に滞在していたが（淡窓日記）、九月九日には「九日同集辛島宅」の詩作があり、この辛島は中津の医師で旧知の文人辛島正庵と考えられるため、重陽には既に中津に帰還し、竹田と本年三度目の歓談に及んだと考えられる。「東坡南遷図」の竹田の自題によれば、十月一日の段階で竹田がまだ正行寺にいたことが確認でき、移動の日時は確定できないが、十月の初頭に、雲華の旧友であり、当時正行寺から西へ約七キロの岸井村（現豊前市岸井）にいた曾木亮（字は子功、号は墨莊）宅に移ったようである。

『師友画録』巻下の「袁亮」の項目によれば、墨莊と竹田は、若かりし頃の竹田の熊本遊学以来の旧知の間柄で、「客冬、予過其居、留二旬」とあり、竹田は十月初頭から十一月初頭のほぼ一ヶ月を岸井村の墨莊宅で過ごしたものと思われる。ここでも竹田は「清江閑泛図」や「雲仙山図」をものすなど旺盛な制作意欲を示し、それは十一月初頭の「梅花書屋図」（出光美術館蔵、重文）で最高潮に達する。そして十一月十三日には墨莊に別れを告げ、下関方面へ向かっている（「旗亭会飲図」自題）。

以上がこの年後半の中津及び岸井村でのおよそ二ヶ月に及ぶ竹田の滞在状況である。本年の竹田画業の主要な成果である二作のうち、前半期の「曲溪複嶺図」については前述の通りであるが、後半期の「梅花書屋図」については次章以下でさらに考察を加えたい。

五 「梅花書屋図」の主題をめぐる問題

「梅花書屋図」に関する主要な先行研究としては、黒田泰三氏と宗像晋作氏の論考が挙げられる²²。両氏共に美術史的観点から、この作品の構図や筆法、竹田作品全体における位置、成立の背景などを考察しており、「田能村竹田晩期の円熟し充実した画法を伝える佳作」（黒田氏）と言われる「梅花書屋図」を考える上で傾聴すべき点が多い。

しかし筆者は、「竹田芸術の代表作は友の死の予感の中で描かれたということになる。強い悲痛を、芸術創造意欲

に高めたということ自体に、すでにこの作品の秀逸は認められなければならない」と評して、この作品に頼山陽の死の影響を考えようとする黒田氏の解釈についてはすんなりと肯定できないものを感じており、そのことは「梅花書屋図」の解釈のみならず、竹田の人間性を考える上でも軽視できない事柄と思われるため、以下その点について考察したい²³。

同氏はこの作品について、「山陽の悪化した病状を氣遣う旅の中で、しかも訃音を風の便りで耳にするという悲しい気持ちで、竹田はこの作品を描いたとするが、七月二十八日付けの太一宛の竹田書簡によれば、竹田は山陽の不予については承知していたものの、「しかし此節ハ大分快方と存候」と、山陽の病状を樂觀的に見ていたのであり、この旅自体、六月末に雲華との間で既に約されており、上洛の目的は自身の著述の刊行や息子太一の学習状況を監督することであって、山陽の見舞いが目的でないことなどは前述の通りである。

そして、九月初旬に中津正行寺に入ってから、十月下旬（筆者は二十三日と特定、後述）に山陽逝去の知らせに接するまでのおよそ二ヶ月弱の間、雲華を含めた中津の文人と竹田とのやりとりの中で、山陽の病状が話題に上ったような形跡は、少なくとも残された資料による限り全くない。

次に、竹田が山陽逝去の事実を認識した時期について黒田氏は、「そののち、小倉に至り、年来の親友、頼山陽の死を知ることになる」とする一方、「ただ十一月、中津および小倉滞留中に耳にはしていたらしい」ともするなど、竹田が訃報に接したのが中津（及び近郊の岸井村）滞在中のことなのか、中津を離れて以降のことなのか曖昧である²⁴。

実は竹田側の資料だけではわからないのだが、雲華関係の資料を参看すると両者が山陽の訃報に接したと思われる日付が特定できる。すなわち、山陽の逝去を悼む雲華の五言律詩五首が残されており、その題名には「十月廿二日、聞山陽老兄訃、悵然有作」とあって、その中の一首に「偶然聞訃翌、同座竹田兄」とあることから、中津正行寺

にて雲華が頼山陽の訃報に接したのは十月二十二日であり、翌日の二十三日には偶然にも竹田と同座していたことがわかる²⁵。竹田が山陽の死を知ったのは十月二十三日なのである²⁶。竹田が岸井村に移ったのは、筆者の推定では十月初頭であるから、岸井村に移って二十日前後経過した頃であり、「十一月之初」の落款を持つ「梅花書屋図」が完成した時点で、竹田が山陽の逝去を承知していたことは確実である。

「梅花書屋図」完成以前に竹田が山陽の逝去を知っていたということはこうして確認できたが、問題は、果たして黒田氏が言われるように、「梅花書屋図」に山陽の死の影響が見られるのか、「強い悲痛を、芸術創作意欲に高めた」ものなのかという点にある。筆者が疑問に思うのは、この作品自体には、客観的に山陽の逝去を指し示すようなもの、人の死を暗示するようなものは、実のところ何もないということである。

画面全体に多く点在するごつごつと屈曲した梅樹の表現について同氏は、「長い年月を経た老梅樹は、その時間の長さを象徴するかのように、複雑に枝をはる。まるで何かに苦しみ跪くようにも映る。」といい、「実際には、この時山陽は死去していたわけだが、おそらくそのことを耳にしながらも、承知しなかった竹田の胸中を、まるで語るかのようにこの作品は描かれたのだろう。梅樹の跪く姿は、竹田の心象なのだ。」とする（傍線は引用者による）。

確かに、見方によってはいささかデモーニッシュな感もある梅樹の描法ではあるが、こうした描法は、前年天保二年の製作である「暗香疎影図」（大分市美術館蔵、重文）でも全く類同したものが見られるのであって、「山水画の点景としての梅樹表現では、文政期末頃より同様の描法を用いている。」という宗像晋作氏の指摘をふまえれば、山陽の逝去とは全く無関係に、以前から竹田が会得していた梅樹の描法であることが明らかである。

結局、「梅花書屋図」に山陽の死（あるいはその予感）が投影されているという黒田氏の解釈は、構図や描法など、作品自体の分析から客観的に帰納し得るものではなく、山陽の死（あるいはその予感）の影響が必ずあるはずだという主観的な強い思い込みから作り出された虚像ではないかと筆者は危惧している。

六 「梅花書屋図」に込められた竹田の意図

それでは、山陽の逝去というような作品外部の条件は一旦度外視して、改めて作品自体の状況を見てみよう。「梅花書屋図」には、「天保三年十一月之初為／土功良友写於墨莊／竹田生憲」と落款があり、曾木袁亮（号は墨莊）の墨莊滞在中に制作されたことが明らかである。縦長の画面全体には、疎影横斜の梅花が満開に咲き誇る様子が多数描き込まれている。

画面は大きく上段（遠景）・中段（中景）・下段（近景）の三つに分かれ、上段には草屋内で読書する一人の人物、中段には回廊でつながれた大きな書屋内で対座する二人の人物、下段には蹇驢に騎乗して中段の書屋を指すとおぼしき三人の人物が、それぞれ描かれている。

ここで、作品が贈られた曾木墨莊について、竹田自身の『師友画録』の記述を確認しておく、「土功梅を愛し、後園を修治して、数株を培植し、泉を引いてその間に澆ぎ、傍に書屋を築き、内に盆蘭を貯う」という園林の中で、「土功、終日静坐して詩を賦し、書もしくは画を作り、倦めば則ち琴を理めて南薰を操ること両三遍」という様子で、梅を愛し書画と琴に耽る、典型的な文人の風貌がありありと浮かんでくる（原漢文）。

梅を愛する隠者として最も著名でしばしば画題にも取り上げられるのは、西湖の孤山に隠棲して梅と鶴を愛した北宋の詩人林逋（字は君復、諡は和靖）であろう。『師友画録』の記述を見ても、曾木墨莊は文人としての自身のイメージを林逋に仰いでいたことがわかる。もちろん竹田もそのことは十分承知していて、画面のかなり多くの部分に河岸あるいは湖岸とおぼしき地形が描かれ、その水辺に梅樹が繁茂している様子は、明らかに西湖の孤山を連想させるものである（補記参照）。

こうしたことからすれば、画面上段（遠景）の草屋内で一人悠然と梅香に包まれて読書する人物は、黒田氏が言

うような「病床にある頼山陽のことを描いた」のではなく、依頼主の曾木墨莊その人と考えるのがごく自然な解釈であろう。

次に、画面中段の大きな書屋内で対座する二人の人物であるが、後述するように、墨莊は性格狷介で人を寄せ付けぬようなタイプの文人ではなく、地元中津の人士と盛んに交際して多くの人々が墨莊を訪ねていた。もちろん墨華もその一人であり、墨莊滞在中の竹田もそうした墨莊に集う雅友たちと親交したのである。

よく見ると、主人は高台に維摩居士のごとき姿勢でゆったりと寝そべっており、対座する人物は両手で巻物を開いている。これを画卷と見れば、この人物は竹田自身とも考えられる。そして画面下段の蹇驢に騎乗した三人は、主人墨莊の手柄を慕って集まってきた中津の文人たちであろう。

つまり、この図には一人草屋内で悠然と過ごす時の曾木墨莊と、雅友と和やかに歓談する時の墨莊という、二人の墨莊が描かれているのであり、雅友と歓談する建物がもつとも大きく描かれていることからすれば、一人で過ごす墨莊よりも、墨莊と雅友との交歓に比重が置かれていると見ることも可能であろう。この画の主題は、墨莊の脱俗性を強調することではなく、墨莊と雅友が織りなす和やかな文人の交わりそのものにあるのではないかと筆者は考えている。それは当時の竹田が次のような状況にあったからでもある。

天保三年、九月の約一ヶ月を中津（正行寺）に、十月の約一ヶ月を墨莊宅（岸井村）に滞在している間、竹田は雲華やその仲間である地元の人たちとの交際を楽しみ、孜孜として作品制作にいそしんでいる。

正行寺では雲華や大有と楽しく過ごしただけでなく、既に文名の高い竹田来訪の噂を聞きつけた中津の文人たちが、入れ替わり集まってきた模様である。墨莊宅に移ったのも、正行寺にやってきて熊本以来の旧交を温めた曾木墨莊が強く慫慂したからであろうし、九月三十日には中津藩医松川修山（号は北渚）宅で八條半坡（兵学者）・津田小石（郡奉行）らと集い、十一月一日には野本白巖（儒者）と北渚・半坡らが竹田を訪ねている。勿論これらの人

士の多くが雲華の古い雅友である。

実はこうした中津の文人たちとの交際が、当時五十六歳の竹田にとつてはことのほか嬉しいものであったろうと考えられるのである。何故ならば、この年七月六日の川上不白宛書簡の中で、竹田は物故者の名前を並べて、「静齋唐橋先生ニ随侍仕候者、大低尺果申候」と、かつて唐橋君山のもとで文事を共にしたもののほとんどが帰泉してしまったことを嘆いている。現在、竹田荘の周囲にいるものは家族と年下の弟子ばかりであつて、対等の立場で往事を語り、雅交を楽しむことのできる人物は岡の市中にほとんどいなくなつていた。

そうした状況の中で、雲華上人という、まさに君山在世時の無名の竹田を知る年長の「兄貴」と、この年の前半には豊前戸次の山水を堪能し、今また雲華の本拠地中津に迎えられ、雲華旧知の気の置けない地元の人々の歓待を受けることは、表裏圭角のある京阪の文人世界の交際とはひと味違う、和氣藹々とした肩肘の張らぬ居心地のよいものであつて、往年の岡での雅交をも思い起こさせたことであろう。

墨荘からの絵画制作の依頼も、早ければ正行寺滞在中の九月に、遅くとも墨荘に移つた十月の下旬以前には受けていたと考えるのが自然で、頼山陽の訃報に接した十月二十三日以前に「梅花書屋図」の構想は既にできており、一部着手もしていたのではないかと筆者は推定する。

こうした状況を見れば、墨荘の依頼作品である「梅花書屋図」の主題は、林和靖よろしく梅に囲まれて自適する依頼主墨荘の姿と、彼を慕つて集う中津の文人との暖かい雅交を描くことにあると考えられるのである。絵の構想は、山陽の訃報に接する以前、既に胸中に醸成されており、山陽の訃報に接したからといって、特に変更されるべきものではない。作品の主題は落款の「為士功良友、写於墨荘」にそのまま表現されているのであつて、山陽の逝去という禍々しい出来事を暗示させるようなものを描かねばならぬ必然性はどこにもない。

よつて、黒田氏の言われるような「訃音を風の便りで耳にする」という悲しい気持ちで、竹田はこの作品を描いた

たとか、「友の死の予感の中で描かれた」もので、「強い悲痛を、芸術的創作意欲に高めた」のだという見解は首肯できない。

「梅花書屋図」という作品そのものを見る限り、そこに表現されているのは春風駘蕩とした春爛漫の梅林と、それを共に楽しむ墨莊や文人たちの姿であり、いささか奇怪にも見える、うねるような梅樹の表現も、つとに竹田が会得していた独自の梅の描法なのであって、「死の予感」とか「強い悲痛」などという悲壯感とは全く無縁なのである²⁷。

もちろん、次に述べるように、竹田が山陽の死について何の感慨もいだかなかったというわけではない。竹田には彼なりの山陽追善の思いがあった。しかし、それを既に構想の出来上がっていた依頼作品に紛れ込ませるといふような、短絡的・衝動的なことはしなかったということである。

七 おわりに

天保三年十月二十三日に頼山陽の訃報に接した後の雲華と竹田の反応はまことに対照的である。雲華は即日あわただしく出立し、およそ二十日後の十一月十三日には入京して頼家を弔問している（小石元瑞宛雲華書簡）。

一方の竹田は、雲華が頼家を弔問に訪れたちようどその日によりやく岸井村の墨莊宅を離れており、椎田・大橋・曾根を経て小倉に入っている。その後、閏十一月には下関にあり、十二月十五日には壇ノ浦で舟遊してそのまま越年した。

明けて天保四年の正月を竹田は長門松原住吉神社内で迎えており、三月三日には壇ノ浦に再遊している。おそらくこれが今回の下関逗留の打ち上げであって、三月十日には「今夕乗船東上」の手紙を尾道の人士へ送っており、三月十五日には大坂に到着、二十日に小石の隠宅である用拙居に入り、翌三月二十一日、ようやく山陽の遺宅を訪ね

て一宿している（以上、『大風流田能村竹田』・『頼山陽全伝』）。

共に頼山陽の訃報に接して以来、雲華が二十日後には早くも頼家を弔問しているのに対して、竹田の弔問が実現するまでには正味半年もの時間が経過しているのは（閏十一月を含む）、京都高倉学寮に学職を持つ雲華とは異なる事情が、竹田にはあったからである。

この半年間、竹田は曾木墨莊ら中津の文人を始めとして、小倉・下関と各地の文人に歓待され、その滞在の先々で文事の流れを行うとともに、孜々として依頼画の制作にいそしんでいた。それは他でもない、在学中の息子太一への仕送り料と京都における自身の滞在費、及び編著の出版費用などを自ら捻出せねばならなかったからだ。多くの潤筆料を得るためには、入れ替わり訪ねてくる文人と親しく交際して画の注文を取り付ける必要があり、その注文をこなすためには連日のように筆を執らねばならず、この頃の竹田には亡き山陽を追憶して感傷にひたるような暇はなかったのである。

そのような日々の竹田が、しみじみと山陽を追憶し、その追善のために筆を執ったと思われるのが、天保三年十二月三十日に下関で描いたという「白衣大士図」（白描白衣観音像）であろう。これまで竹田はいくつかの白衣観音像を描いており、その目的は渡航の安全を祈願・感謝することや、家族の病氣平癒を祈念するものであった²⁸。この度描かれたものには、この年の四月に山陽から雲華に託されて竹田のもとに届いた山陽自刻の「小白石翁」の印を用いており、山陽追善の意図が認められるだろう²⁹。

また竹田は、山陽遺宅を弔問して後の天保四年三月三十日に、山陽グループの一員であり、絵師でもある浦上春琴（玉堂の子）から、山陽の「女弟子」江馬細香の「奉挽山陽先生」と題する七言律詩三首を示されて、「予は山陽を哭する詩を作らず、又、人の山陽を哭する詩を読むことさへも厭ふ。春琴紀兄、この稿を出示す、読んで即ち竟り、悵然として涕下れり。」と感想をもらしている。

これを見ると、生前の山陽との交際の深淺にかかわらず、我も我もと山陽の追悼詩が乱発されていたようで、そうした風潮を竹田が苦々しく思っていたことがうかがえる。竹田は自らの心中に山陽との記憶を反芻して故人を偲んでいたのであり、江馬細香の詩に自分と同様の山陽に対する思いを読みとって思わず涙したのである。

以上、雲華上人と田能村竹田の交流の実態と、そこに影響を受けた竹田の画業のいくつかについて考察した。両者の初見は通説より二十一年も早い享和二年であること、竹田の「芙蓉残雪図」は雲華の富士登山をふまえて制作され、同人に贈られたものであること、「梅花書屋図」は雲華旧知の中津の文人曾木墨莊とその仲間たちの雅交を表現したものであることなどがわかった。従来、竹田側の資料を見ていただけではわからなかった竹田の事跡や思想が、雲華側の資料を交差させることでより立体的に浮かび上がってきた。今後は絵画資料のみならず、竹田の著述の中にも、雲華上人との関係の足跡を探ってみたい。

*1 田能村竹田の主要著作のテキストとしては、『大分県先哲叢書 田能村竹田資料集』全四冊(平成四年、大分県教育委員会)があり、その他に注釈書として、竹谷長二郎氏『文人画家田能村竹田―「自画題語」訳解を中心に』(昭和五六年、明治書院)・同氏『竹田莊師友画録訳解』(一九七七年、笠間書院)・同氏『田能村竹田画論』(山中人饒舌)訳解』(二〇一三年、笠間書院、一九七五年の改題改訂版)などがある。

*2 拙稿「雲華院釈大含信慶講師(雲華上人)年譜稿」『寺社と民衆』一〇(二〇一四年)。なお、簡略な雲華の年表としては、影山純夫氏『雲華上人年譜』『日本文化論年報』一五(二〇一二年三月)があり、更に古くは赤松翠陰氏『雲華上人年譜』『中津史談』四(昭和十五年二月)がある。

*3 北村清士氏『雲華上人・角田九華小伝』(昭和二九年一月、田能村竹田先生百廿年祭協賛会)二頁には、「八才の頃、同じ竹田市字平、西休寺の宝珠庵遠慶につき漢文の素読を初め、作詩を稽古された。西休寺にその遺跡として、勉学堂が残

- つて居たが、西南の役で焼失した」とある。北村氏は元竹田市立図書館長で、満徳寺を始め、地元の資料や伝承によつてこの伝記をまとめており、全二十六頁の小冊子ながら、雲華に関する重要かつ信頼すべき事項が記載されている。雲華の実父について、ほとんどの諸書が「円黙」（あるいは円點）と誤記するのに対して、「円寧」と正しい名を記すことなどはその最たるものである。西休寺については『雲華上人遺稿』一七一頁下に「過西休寺」と題して、「不過西休寺、星霜五十年、相迎僧白髮、話尽旧因縁」という天保三年雲華六十歳の帰郷時の詩が収録されている。
- *4 木崎愛吉編『大風流田能村竹田』（昭和四年、民友社）巻一の天明二年竹田六歳条に、「城外豊岡の七里村に在る碧雲寺（藩主菩提所）の西に隣れる英雄寺七世の住職道寿和尚（肥後阿蘇郡防中の出身）に従ひ、素読・習字を修む」（一二頁）とある。
- *5 ただし、雲華の生家である満徳寺と田能村竹田の菩提寺光西寺は、いずれも東本願寺の末寺（現真宗大谷派）であること
を付言しておく。
- *6 宗像晋作氏「末弘雲華の画業について―蘭の専一画家としての側面を中心に」（『出光美術館研究紀要』一四（二〇〇九年一月））。
- *7 赤松文二郎編『雲華上人遺稿』（昭和八年、後凋閣）二五六頁下に「謝田行藏」と題して、「君題山水画、便面附新詩、贈我情何厚、清風無已時」の漢詩が記されている。
- *8 円通閣での文事については宗像健一氏「田能村竹田」（一九九三年、大分県教育委員会）四一頁参照。
- *9 享和三年の「漁父図」は、宗像健一氏編著『田能村竹田基本画譜 図版篇』（二〇一一年、思文閣出版）七頁に掲載。また竹田商工会議所青年部編『田能村竹田』（平成一六年）四六頁にも掲載。
- *10 拙稿「雲華上人の魅力を再評価したい」（『中外日報』二〇一四年五月一六日記事）。
- *11 前掲『雲華上人遺稿』一一〇頁下に「登岳有懷竹田詞兄」と題して「六月芙蓉冷似秋、暑天登者畫披裘、竹田高士多奇骨、恨不一時同此遊」とある。
- *12 『卜夜快語』は前掲『大分県先哲叢書 田能村竹田資料集』著述篇所収。
- *13 「芙蓉残雪図」は前掲『田能村竹田基本画譜 図版篇』三四頁、「田能村竹田」六三頁に掲載される。
- *14 宗像健一氏編著『田能村竹田基本画譜 解説篇』（二〇一一年、思文閣出版）五九頁。

- *15 前掲「雲華上人遺稿」一六九頁下に「重別山陽、同海屋」と題して、「鴨河風雪鬱難開、一日過君已兩回、更有故人同勸醉、海山千里此離杯」とある。
- *16 個人蔵「雲華上人蘭竹双清図」（絹本一軸、百活園旧蔵）には「壬辰夏五写於佐伯雲華」と落款があり、この年の佐伯滯在中の作品であることがわかる（後掲図版参照）。
- *17 前掲「雲華上人遺稿」一七二頁上に「六月十八日戸次川舟遊同竹田翁及帆足兄弟」と題された七言絶句が記されている。
- *18 「曲溪複嶺図」は、前掲「田能村竹田基本画譜 図版篇」八二頁、「田能村竹田」九五頁に掲載される。なお、「曲溪複嶺図」及び前章の「芙蓉残雪図」は、戸次帆足家富春館に伝来した作品であり、これらについては、「富春館作品集—戸次帆足家伝来」（大分市美術館、一九九九年）、「文人の夢—田能村竹田の世界」（静岡県立美術館、二〇〇五年）に図版が収録されており、後者には野田菜生子氏「天保三年の夏—曲溪複嶺図制作の背景」が掲載される。
- *19 前掲「田能村竹田基本画譜 解説篇」一三三頁上。
- *20 田能村竹田の『自画題語』卷三には、「複嶺疊障図」と題された「壬辰六月二十五日」の題跋文が掲載されており、『曲溪複嶺図』の漢詩幅の文章とは異なるところがある。恐らくこれは現在所在不明の雲華に贈られた画幅に記載されたものと考えられる。なお、これら二種類の題跋に共通して含まれる五首の漢詩は、『杜少陵集』の「暮春題漢西新賃草屋五首」にそれぞれ次韻したものであるが、この作品におけるそうした行為の意味合いについては別途考察する必要がある。
- *21 国元で上洛の許可を得るにあたり、竹田は、「京都小石元瑞え療用相頼」むことと、「自身著述之書物類板行二致、世間二為弘申度」きことを理由として挙げている。『大風流田能村竹田』二卷四二六頁。
- *22 黒田泰三氏「田能村竹田筆「梅花書屋図」の成立をめぐって」『出光美術館報』七五（一九九一年）、同氏「田能村竹田の二つの画—天保三年秋と天保四年春のあいだ—」『出光美術館研究紀要』三（一九九七年）、宗像晋作氏「田能村竹田筆「梅花書屋図」について」『出光美術館研究紀要』一二（二〇〇六年）。なお、黒田氏の二つの論考のうち、一九九七年のものは天保三年の「梅花書屋図」と天保四年の「村居暁起図」を取り上げたもので、「梅花書屋図」に関する見解については一九九一年の論考と同論で簡略であるため、本稿で引用する黒田氏の見解は、より詳細な一九九一年の論考に拠った。また、以上二氏の他に、前掲宗像健一氏編『田能村竹田基本画譜 解説篇』（一三九頁—一四二頁、二〇一一年）の解説記事も重要である。

*23 「梅花書屋図」に山陽の逝去の影響を見る黒田氏の解釈について、前掲宗像晋作氏論考では、「確かに、最も大切な友を失った直後の竹田の心境を鑑みるならば、頼山陽への追憶、鎮魂といった感情が絵画制作に反映し、何らかの作用を生むことは十分に考えられてよい。」とこれに同調しているが、一方、前掲宗像健一氏の解説記事では、そもそも山陽の訃報到来の事柄自体、全く言及されておらず、作品に山陽の死の影響を認めるかどうか、両氏の立場は対照的である。

*24 山陽の訃報到来の時期について、現在に至るまで最も浩瀚な竹田の伝記資料集である木崎愛吉(好尚)編著『大風流田能村竹田』全八冊(昭和四年、民友社)には「十一月日、中津に在り。山陽の訃音至る。(中略)十一月日、小倉に在り。山陽の訃に就き」(第二巻四一〇頁)などあつて、日付や場所が特定されていない。おそらくこうした記述が黒田氏の記述に影響を与えているものと思われる。

*25 山陽の逝去を悼む雲華の五言律詩五首は、これも現在に至るまで最も浩瀚な山陽の伝記資料で、同じく木崎愛吉の編著たる『頼山陽全伝』(昭和七年)に記載されている(下巻五八三頁、『雲華上人遺稿』未収録)。

*26 竹田が山陽の訃報に接した時期について、前掲宗像晋作氏「田能村竹田筆『梅花書屋図』について」では、竹田が中津の文人津田小石に贈った七言律詩の題に「此日頼山陽訃至」と書き添えられていることを紹介して、「その訃報が竹田のもとに届いたのは、中津諸友との別宴の席においてであつたようである」とするが、日付の特定にはいたっていない。

*27 前掲宗像健一氏の解説記事でも、「本図は、遺作中で最もなだらかな山容、最もゆったりとした平遠近風流水・平泉部が描き込まれた図であり、(中略)こうした自然の中での交遊を様々に回想する中にこそ着想されたものであるように思われる。」とする。同氏が頼山陽の死(あるいはその予感)について全く言及されないのは、前述注23の通りである。

*28 前掲宗像健一氏編『田能村竹田基本画譜解説篇』一四六頁参照。

*29 前掲木崎愛吉編『大風流田能村竹田』二巻四一二頁参照。

(補注)

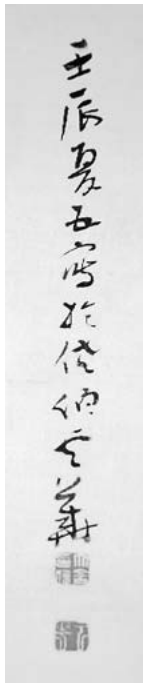
本稿入稿後の平成二十七年四月十一日、曾木亮(字は士巧、通称仁六、号は墨莊)の關係地を訪ねて、豊前市岸井及び黒土を訪ねた。田能村竹田は「梅花書屋図」を「墨莊」にて描いたと自著しているが、『筑上郡誌』下巻三九五頁によれば、竹田が滞留したのは、曾木亮が岸井手永の大庄屋として勤めていた「岸井の役宅」とする(手永とは、郡と村の中間に位置する行

政単位)。この役宅の場所について地元での聞き取りでは、現在の黒土小学校の東にある釘丸池の周辺であったという。

一方、竹田に同行していた帆足杏雨が残した「京游詩画帖」の中の「岸井村図」を見ると、『富春館作品集―戸次帆足家伝来』(六二頁)、役宅と思しき屋敷に向かって右側に特徴的な樹木が描かれているが、この木は「矢野家のもっこく」(豊前市指定天然記念物)として現在も存在する樹木と同一と見られるため、ここが竹田の滞在した墨荘ではないかという豊前市教委の回答を得た。この矢野家とは久路土(黒土)手永の大庄屋であり、曾木亮の妻(『筑上郡誌』では母とするが、墓碑銘により妻と判明)がこの矢野家の出身であったから、曾木亮も一時久路土手永の大庄屋を勤めたようだ。

つまり、竹田が滞在した曾木亮の「墨荘」の位置については、釘丸池周辺の岸井手永と、もっこくのある矢野家久路土手永の大きく二つの説があり、この両者は直線距離にして約五百米ほどの近距離である。杏雨の描いた「もっこく」を根拠とすれば、久路土手永が有力かもしれぬが、筆者が注目するのは、岸井手永は釘丸池という貯水池のほとりにあったという事実である。

竹田の「梅花書屋図」には、本文で述べたように梅樹の繁茂する水辺の光景が大きく描かれている。現在、釘丸池の周囲には桜が植えられているが、これを梅に置き換えてみれば、まさに竹田の描いた情景と近似してくる。この池に限らず、この地方には現在も大小の貯水池が点在しており、こうした実景も「梅花書屋図」に影響を与えたであろうことに注意しておきたい。豊前市の現地調査にあたっては、中津市在住の島藤寿敏氏より御高配・御教示をいただき、同氏を通して、豊前市在住の橋本和寛氏作成曾木墨荘関係資料を拝見することができた。あわせてあつく御礼申し上げます。



「雲華上人蘭竹双清図」(天保三年、絹本一軸)